

る人格を、己が人格となせ。幸に吾人は、本化の末流を掬する上は、何に愚なりと雖も妙法を持つ故に吾人豈上人ならずや。吾人は益々以て聖訓を奉戴し此苦海に漂流する一切群生をして、光明赫々たる、眞の信仰界に導き、永遠限りなき、信念生命を保たしむるは、吾人の大責任ではなからうか!

## 折空觀と体空觀

太田 純志

折空觀は、小乗の觀法にして、三藏の三乗の人の修する所の觀法なり、折とは、折破の義にして、所謂諸法は、眼前に歷々たるものなれども、皆、生滅無常の物にして、山も崩れ、河も埋まれば、其体は空となるなり、まして況や、千草萬木を始として、六道の生類に至るまで、何物か一として常住の法あらん哉、これ皆生滅無常の法なれば、一法として執着すべきにあらず、是を芭蕉泡沫に譬へたり、芭蕉榮たる時は好けれども、風に吹れば、皆散々に破るゝ物なり、泡沫とは、水上の浮泡の如く、目に留る

こと無く淡き物なり、諸法を、如斯觀じて而も煩惱を斷するなり、但舍論に曰「諸色を分折して一極微に至る」と。

此の觀法を、生滅觀亦是拙度觀とも名づくる故は、是の觀法に於て、大小乗の空觀淺深不同にして、この不同を顯さんが爲、時に應じて其名を樹るなり。

折空觀とは、觀法の智慧を以て一切物心の諸法を分折して、我空の理を觀するなり。

生滅觀とは、物も心も皆無常念々を以て、人法空を知り、是こそ衆生の体ぞと名けらるゝ常住の物体一として有る事なしと觀するなり。

拙度觀とは、大乘觀法の体空觀に比して、小乗の觀法なるが故に、つたなく、其の行相は無常無我の觀なり、これ等を具には折色入空觀と名づく、如斯名字を樹る事は、本外道の邪折を對破せんが爲にして外道は道心を折破して、一極一刹那に至つて、或は斷無と計し、或は常住に執す、是即邪見なり。

されど、三乗同く折空觀を終すれども、諦緣度の三所學同じからず、即ち聲聞は四諦の法門に就て折空觀を修し、緣覺は十二因緣の法門に就て折空觀を修

し、菩薩は六度の法門に就て折空觀を修す、如是三乘同く折空觀を修すとも諦縁度の差別を以つて三乘の不同を知るべし。

体空觀の体とは、体達亦是体悟の義なり、諸法を押へて即空と体達するが故なり、諸法を推檢するに、既に性實無く、但虚相のみ有り、故に如幻即空觀とも名く、此の觀は大乗の觀法にして、一切萬有は實の自性ある事なし、若し萬有に實の自性ありとせば因縁を藉るの必要なるべし、然るに萬有は皆因縁を藉て生ずる事を得る故に、は實の自性ある事なしと、萬有其まゝ置て當体即空なりと体達す、我が、弘治の頃大内義隆が陶全蓋に弑せられんとしたる時三尺の秋水を白眠つゝ、

討ち人も討たる人も諸共に

如露亦如電 應作如是觀

と詠じたりき、亦鏡像水月の譬を以つても知るべし、通教は大乗にして、其義深き故に三藏より勝れて、相即の旨を明す、即ち煩惱の体を押へて即空と明し、煩惱即菩提の義を談するなり、生死即涅槃の義、これに准じて知るべきなり、通人既に諸法如幻幻本と

生せず、今滅する所無しと觀す、六風依正の色、幻の如く化の如し、當体即空なりと依りて、眞理に入るなり。

## 御會式に就て

藤田 圓海

今を去ること、六百三十三年前即ち弘安五年十月十三日 末法救護の大導師たる我祖大聖人は、武州多摩河の邊り、池上山の霞と消へ玉ひぬ、我等このことを、追想し奉るだに涙の種ならざるはなし、宗祖大聖人常住の法身は、法界に遍滿して、感あれは則ち應じ給ふと雖も、應現の肉身即ち英爽の風姿温平々たる慈顔は、遂に拜すること能はず、嗚呼悲哉生死は世相の常規と、佛の教へ給へるに、何ぞ斯く哀歎の情禁する能はざるか、怪む勿れ！ そは唯宗祖大聖人を追慕し奉ればなり、何が故ぞ斯く追慕するかそは大聖人の御恩徳の深大なるを感謝すればなり、何が故に感謝するか、そは大聖人の教を信することの切なればなり、そは我等が復活の道、一に此教に